

○平成 14 年度海外派遣研修

「アメリカ ノースカロライナ州 TEACCH プログラム視察研修」

附属病院診療部 助手 岡田祐輔

○期間 平成 14 年 8 月 4 日（日）～ 8 月 12 日（月）

○研修先 アメリカ ノースカロライナ州 チャペルヒルおよびシャーロット
TEACCH プログラム関連施設

1. 研修の目的

自閉症児者に対する、治療教育、生活支援のプログラムとして、世界的に評価の高い、ノースカロライナ大学の TEACCH プログラムについて、その考え方や、実践内容を学び、関連施設を見学することで、日本における自閉症児者に対する支援方法に役立てる。

2. 研修の概要

日程および見学先、研修内容

表 1 のような、TEACCH プログラム関連施設の見学のほか、TEACCH 部スタッフによる講義（セミナー）を受講した。

表 1

4 日（日）	移動	
5 日（月）	講義 「TEACCH プログラムの概要」	見学 グレン・フォレストグループホーム ジェイド・ツリーグループホーム ウォルナット・グループホーム
6 日（火）	講義 「高機能自閉症／アスペルガー症候群」 「TEACCH の歴史」	見学 CLLC（カロライナ生活訓練センター） キャンプロイヤル
7 日（水）	講義 「評価の仕方（PEP-R と AAPEP）」	デモンストレーション 「PEP-R と AAPEP」
8 日（木）	講義 「就学前児に対する TEACCH プログラム」	見学 アルベマールグループホームの学校プログラム
9 日（金）	講義 「就労支援」 「親の会のかかわり」	見学 クリエイティブリビング SAS 研究所での就労支援プログラム
10 日（土）	講義 「研修のまとめ・質疑応答」	
11 日（日）	移動	
12 日（月）	到着	

3. 研修のまとめ

TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children) とは、ノースカロライナ大学で 30 年の歴史をもつ、自閉症児者のための、プログラムである。

TEACCH ででの実際のサービスには表のような、さまざまなものがあり、これらが、自閉症の人たちの特徴に基づいて、工夫されている。

表 2

① 診断	⑥ 居住プログラム
② 拡大診断サービス	⑦ 就労プログラム
③ 親のためのサポート・グループ	⑧ さまざまな機関との連携
④ ソーシャルスキル・グループ	⑨ トレーニング・プログラム
⑤ クラスルーム・プログラム	⑩ 研究活動

自閉症の人に対する基本的な理解として、神経学的基盤、学習法、さまざまな特性、思考過程、感覚、理解の仕方などにおいて、「自閉症の人は我々と異なる部分、異なる文化をもっている」という認識がある。その上で、自閉症の人達の文化を理解し、認め、尊重しているのが、TEACCH ということができる。

例えば、自閉症の問題行動の多くは「不適応行動」であり、適応できる環境を提供できていないということが、原因になる。単に表面に出ている行動よりも、問題行動の背景を重視することが必要になる。

自閉症と言う障害の特性に配慮することと同じくらい重要なこととして、個人の特性に配慮するということがある。これは現地の見学において、初めて理解できたことであった。個性、能力、意志、コミュニケーション方法、感覚過敏への配慮、興味、関心などに応じて、内容、難易度、時間配分などを検討、調整することが必要で、理論的背景は同様であっても、画一的な対応は、個人を尊重することにならない。

TEACCH で用いられる「構造化」も、自閉症の人を枠にはめこみ、いやなことに無理に従わせるための道具ではない。自閉症の人にも、一人一人違った個性があり、能力があり、意志があるので、画一的な構造化は意味がない。個別化して考えないと、うまくいかない。

このような個別の配慮には、コミュニケーション、認知能力、興味や関心、得意なところ、などの評価が重要になる。

自閉症の人を我々に合わせるのではなく、我々が自閉症の人に合わせることで、自閉症の人を理解し、尊重することが必要であり、これは、自閉症の人に対するバリアフリーであり、自閉症という異文化とのコミュニケーションである。このことを実践しているのが TEACCH であった。

また TEACCH では、さまざまなトレーニング・プログラムがあり、特定の専門家のみでなく、多くの人が自閉症を理解できるように、そして適切な支援ができるように工夫されていた。しかも、幼児期から成人期まで、一貫した方針で対応されていることは、日本での自閉症児者の対応にも、生かされるべきであると思われた。